

本多静六通信

第34号

発行  
本多静六博士会  
を顕彰する会

## 第七十五回全国植樹祭 六十六年ぶりに埼玉県で開催！

埼玉県農林部全国植樹祭推進課 副課長 浅海 殉也

### ■はじめに

令和七年五月二十五日に、第七十五回全国植樹祭が埼玉県の秩父ミューズパーク（秩父市、小鹿野町）で開催されました。天皇陛下をはじめ全国から約四千五百人が参加し「人・森・川 つなげ未来へ 彩の国」をテーマに、健全で豊かな森林を未来へ引き継いでいくことを誓い合いました。埼玉県内での開催は昭和三十四年に寄居町金尾山で行われた第十回大会以来六十六年ぶりとなります。

### ■開催の概要

#### 【開催理念】

○適切な森林の整備と森林資源の循環利用を推進し、森林の持つ多面的機能を持続的に発揮することで、森林・水・木材と私たちの暮らしや産業との結び付きを深め大切にしていきます。

○豊かな川で繋がる山村と都市が、協力して森林・みどりを共有の財産として守り育て、元気な姿で未来の子供たちへ繋いでいきます。

#### 【大会テーマ】

「人・森・川 つなげ未来へ 彩の国」(大会テーマ)には、山村や都市など県に暮らす「人」が、植樹によって「森」を育み、森林から流れ出る「川」によって人々の生活が潤される営みを「未来」の子供たちにつないでいこうという強い思いが込められています。

開催日当日は、前日からの雨が朝方まで降り続き、天候が心配されましたが、招待者が到着し始めるころまでには雨が上がり、秩父の山々に雲がたなびく幻想的な風景の中、天皇陛下をお迎えすることができました。

式典で天皇陛下は「私もかつて武甲山や雲取山、両神山などの秩父や奥秩父の山々に登ったことがあり、原生林を思わせる奥深い森林や渓谷などの美しい自然に魅了されたことを今でも懐かしく思い出します。一人一人が、これからも森林を大切に、木の循環利用を進めながら健全な森林を育み、未来へと引き継いでいくことは、私たちの果たすべき使命であると考えます」とのお言葉を述べられました。



天皇陛下をお迎えした式典会場

天皇陛下によるお手植え・お手播きでは、県の木であるケヤキ、本県の林業を担う少花粉スギ、県西部の山地に広く自生するトチノキの苗木を植えられ、少花粉ヒノキとアカシ

デの種をまかれました。介添えは「緑の少年団」の子供たちが行いました(久喜市三箇小 緑の少年団の皆さんには特別招待者の介添えを行っていただきました)。



天皇陛下の「お手植え」と緑の少年団の介添え

大野知事は主催者あいさつで「多彩な魅力を持つ本県には県土の約三分の一を占める恵み豊かな森林があります。この大会を契機に、県民全体で森林を守り育てるとともに、森林資源の循環利用を図る※活樹の重要性を発信してまいります」と決意を示されました。

※『伐って・使って、植えて、育てる』という森林資源の循環利用を進め、木材活用など森林を活かすことを「活樹」という言葉で表し、今回の全国植樹祭の重要なキーワードとして使用しています。

大会テーマの表現（アトラクション）では、県内出身の林家たい平さん、朝日奈央さんがナビゲーターを務め、本多博士の功績を紹介。更に本多博士に扮した声楽家の原田勇雅さんがオリジナル楽曲を歌い上げました。

緑化運動や緑化コンクール入賞者、緑化功労者の表彰も行われ、森林資源の循環利用を促進する「活樹」の推進などを盛り込んだ大会宣言をしました。リレーセレモニーでは、大野知事から来年の開催県である愛媛県の中村時広知事に大会シンボルの木製地球儀を引き継ぎました。



次期開催県である愛媛県へのリレーセレモニー

■式典で紹介した本多博士の言葉

記念式典で原田勇雅さんが歌われたオリジナル楽曲『想いつなげて』の中で、昭和六年に本多博士がラジ

オ放送した「植樹デーと植樹の功德」の次の一節を引用しました。

『自分が植えた樹には一段と親しみをもち、その木を愛する事になる。木を植えることは、愛を植えるものであります』

昭和二十五年に始まる全国植樹祭より以前、東京府では大正十一年に毎年四月三日を植樹デーと制定し、大正十五年から植樹祭を実施していたようで、ラジオ放送のあった昭和六年四月三日は日比谷公園で行われる第六回植樹祭の当日だったようです。

本多博士はこのラジオ講演の中で、植樹の功德（良い結果）を大きく二つに分けて述べられています。一つは（甲）樹を植える人即ち本人に対する植樹の功德、もう一つは（乙）社会人類に対する植樹の功德です。（乙）はいわゆる森林の公益的機能についてで、水源涵養機能や国土保全機能などに言及し、現在でも森林を保全する重要な視点として取り上げられています。一方（甲）については、樹を植えることによる個人の肉面的な利点を挙げており、本多博士の著書の中でも珍しいものと認識しております。具体的には以下の七項目を挙げています。

のである

其二、植樹は忍耐を植うるもの

其三、樹を植うる事は希望を植うるものである

其四、植樹は喜びを植うるものである

其五、樹を植うる事は平和を植うるものである

其六、樹を植うる事は若き心を植うるものである

其七、樹を植うる事は愛を植うるものである

（原文のまま）

それぞれに解説が付いていますが、ここではオリジナル楽曲で引用した其七の解説を記載させていただきます。

『自分が植えた樹には一段と親しみをもち、其木を愛する事になる。それが進んで一般の草木を愛する事になります。殊に繁れる樹は如何なる人生の旅人にも同じ様に美しき天幕を高く拡げてやる。それは實に永久に人生の愛護者であります』  
そして、講演の最後をこのように結ばれています。

『されば諸君、樹をお植ゑなさい。

今日の植樹デーを記念に樹をお植ゑなさい。神も、佛も、樹を植うる者を助け、樹を植うる者に天總ゆる幸福を持ち来すのであります』

今回の全国植樹祭の開催理念には

「森林・みどりを共有の財産として守り育て、元気な姿で未来の子供たちへ繋いでいきます」とあります。

樹を植える事により健全な森林を子供たちに残していくとともに、樹を植えることが人の内面に働きかける大切さも未来の子供たちに繋いでいきたいとの思いから、本多博士の言葉がオリジナル楽曲の歌詞に引用させていただきます。

■むすび

今回の全国植樹祭では、「活樹」という言葉を森林資源の循環利用のキーワードとして使用しました。

「活」という字には、勢いよく動く、生き生きしているなどの意味があります。今回の全国植樹祭を契機に、埼玉県の森林・林業に「活気」が出て、新たな人材が「活躍」することを期待しています。

むすびに、全国植樹祭の成功に向けて御尽力いただいた関係者をはじめ、大会の趣旨に御賛同いただき、御支援・御協力を賜った全ての皆様へ、心から御礼申し上げます。

【引用文献】

本多静六一「植樹デーと植樹の功德」  
（『山林』五百八十二号・一九三一年五月）

# 羽ばたけ!

## 本多静六博士の母校久喜市立三箇小学校の子どもたち

三箇小学校長 志村 圭介

### ■本多博士の思いをつなぐ日々の学習

約四千五百人が参加した今大会では、日本初の林学博士であり、海外留学経験から植樹祭を日本に紹介した本多静六博士の業績が大きく取り上げられました。静六博士の国土緑化への思いは、現代における持続可能な社会の構築に通じるものであり、三箇小の子どもたちもその精神を受け継ぐと日々学習に励んでいます。

今回、本会場及びサテライト会場（久喜市 モラージュ菖蒲）での催しに子どもたちが参加し、自然の大切さを実感する貴重な体験ができました。子どもたちの活躍をご報告いたします。

### ■記念植樹介添え体験を踏まえた今後の取組み

本会場では本校の六年生八名が「代表者記念植樹」の介添えという大役を担いました。天皇陛下によるお手植え・お手まきにあたり、小泉農林水産大臣などの要人が行う植樹の介添えに、子どもたちは緊張しながらも真剣な表情で臨みました。

参加した児童は、「天皇陛下と一緒に活動できて貴重な体験でした」

「とても緊張しましたが、植樹のお手伝いがうまくできたのでよかったです」「林業の大切さについて詳しく知ることができました。林業をよくする活動や環境を守る活動に、積極的に取り組んでいきたいです」と感想を話していました。

子どもたちにとって、一生忘れない経験となりました。



記念植樹の介添えをした六年生8名と久喜市長、市議会議長、教育長

### ■会場を明るく包んだ元気いっぱいダンス

久喜市に設けられたモラージュ菖蒲において本校の四・五・六年生十名が様々な発表活動を行いました。

本多静六博士の生涯や功績をまとめたスライドを作成して来場者の方々に説明を行った他、博士にまつ

わるクイズも企画して、参加された方々に楽しく学んでいただく工夫を凝らしました。

SDGsをテーマにしたYOASOBIの楽曲「ツバメ」に合わせてダンスも披露しました。このダンスには、子どもたちの「地球の未来を守っていこう」という思いが込められており、元気いっぱいの表現は会場全体を明るく包み、多くの来場者の皆様から温かい拍手をいただきました。



YOASOBIの曲に合わせてダンスを披露する子どもたち

この発表活動に参加した子どもたちからは「木も生きてると気づきました。家の桜の木も大切にしたいです」「人前で発表するのは緊張したけれど、先生の熱心な指導で自信をもって望めました」「素晴らしい日本の自然を大切にしていきたいです」といった感想が寄せられました。

自分の思いを相手に伝えることで、

自らの学びを深めるということが体験できました。

### ■おわりに

この全国植樹祭を通じて、子どもたちは自然や森林の重要性を改めて考えるきっかけを得ることができました。また、本多静六博士の精神に触れたことで、ただ緑を守るのではなく、それを次の世代につないでいくことの大切さも学びました。まさにそれは、大会のテーマでもある「活樹」であると考えます。埼玉県の人工林の八十パーセントが利用可能となっている今、「木を切って、使って、植えて、育てる」という好循環を機能させることが喫緊の課題です。子どもたちが、「森や公園を大切にすることを参加したい」と語ってくれたことは、私たち大人にとっても大きな励みとなり、意義深い大会となりました。

三箇小学校は、植樹祭をおして育まれた子どもたちの思いを今後の教育活動に生かしながら、静六博士の「自分が植えた樹には、一段と親しみを持ち、その木を愛することに。木を植えることは愛を植えるものであります」(植樹デーと植樹の功德・昭和六年)という意思を受け継ぎ、地域社会と協力しながら緑を愛し守る心を育み、緑豊かな未来を築いていく努力を続けてまいります。

## 第十八回本多静六賞受賞

秩父森づくりの会

会長 市川恵造

### はじめに

このたびは第十八回本多静六賞という荣誉ある賞を賜り心より感謝申し上げます。また今回は昨年の五月二十五日(日)秩父市で行われた全国植樹祭の場で天皇陛下臨席のもと、埼玉県内の緑化関係者百組ほどの個人・団体を代表して表彰していただいたこと、あわせて前日には天皇陛下に私たち「秩父森づくりの会」の活動をご説明するという機会を与えて下さり、身に余る光栄でも貴重な体験をさせて頂いたことを感謝申し上げます。



大野 埼玉県知事より花束を受け取る市川恵造氏

### ■秩父森づくりの会

私たち「秩父森づくりの会」は平成二十二年、間伐材の薪利用でエネルギーの自給自足と森林再生を図るため、当会の前身であるボランティア

ア間伐隊が秩父市民や荒川流域の都市住民等により結成されことに始まります。平成二十四年に本会「秩父森づくりの会」が結成されました。間伐などの森林整備のほか、小学生等への森林環境教育、各種イベントでの普及活動を開始しました。会員は現在三十四名。

### ■活動について

本多静六氏に縁のある秩父地域で活動場所に盛夏の八月と厳寒期の二月を除き、毎月二回、年間二十回程度活動しています。設立当初は秩父市大滝地内の私有林などでも活動していましたが、最近では県南等からもアクセスしやすい横瀬町内公社林で間伐や枝打ちを実施しています。当初はノコギリと手斧で間伐していましたが、現在は講習を受けチェーンソーやプロロック(手動式牽引機)、ポータブルウィンチ(動力式牽引機)なども使用し、機械が使えるボランティア団体として活動しています。間伐した材は薪割り機で薪にし、年間三百ケースほど販売して会の活動資金とし、経済的自立に努めています。

当会は設立当初から積極的に都市部の人たちを受け入れてきました。このため会員の約五割は秩父地域以外のの人たちです。また、会員の二割

が薪ユーザーであるのも特徴的なことであります。これは秩父の森林の良さを都市部の人たちに知ってもらうとともに、継続的に森林整備を続けていくためには間伐材を使う側の確保も重要と考えているためです。



笑顔で活動する会員

会では森林整備のほか、子供たちや一般の人たちと交流するため、間伐体験やリースづくり、ヒノキの葉を利用したエッセンシャルオイルづくりなどのイベントも年一回程度開催しています。

### ■林業への貢献

最近、当会の活動をきっかけに、会員のなかから本格的に林業(自伐型林業)を目指す人たちが現れだしました。令和四年度に秩父地域で「自伐型林業体験研修」が開催されましたが、さらに技術を磨きたいと研修修了生の多くが当会に入会してきました。そのため参加者の人数制限を検

討しなければならなくなることもありました。会員の中には四十日間にわたる「埼玉県林業技術者育成研修」を受けた者も三名おります。

### ■林福連携

当会では林福連携を実践し、福祉関連施設に収入の一部を還元しています。具体的には秩父市内にある就労支援の障害者施設に薪割りと薪の管理・販売をお願いし、販売代金の一部を委託料として施設に支払っています。障害者に仕事がないなか、当会との連携は定期的な労働と収入につながり自立の一助になると施設の人たちに喜ばれています。薪を購入する人たちにとっても、いつでも薪が買えるため便利だと喜ばれています。

### ■おわりに

当会でレベルアップした人たちがさらに技術を磨いて自立を目指すなど、秩父地域では会の活動を足がかりとして、林業の担い手の道筋ができてきつつあります。会では今後も都市部の人たちなどが気軽に森林の作業に親しむ窓口団体として、秩父の森づくりに貢献していく予定であります。今回の受賞を励みに、これからも森林の良さを伝えていけるよう会員一同努力を重ねていきたいと思

## 【随想】

## 本多静六 若者よ、人生に投資せよ

作家 北 康利



拙著発刊後の波紋は大きかった。

埼玉に拠点を持つ文果組が、拙著をもとにして「永遠の森 名曲と朗読で綴る本多静六とその時代」というニュースタイルオペラを始めて下さったのはその最たるものである。

令和五年十月大宮レイボックホールで初演。令和六年一月には、初演に感動して下さった十勝の和田農園さんのご支援で幕別町百年記念ホールで再演ができ、令和七年の一月には埼玉県知事や久喜市長にもお越し頂いて埼玉会館小ホールで三回目の公演が行なわれた。

令和七年五月に全国植樹祭が行なわれたのは奇縁である。そもそも植



本多静六博士でオペラや著作を取り上げている著者

樹祭は本多博士の尽力で始まったものなのだ。永遠の森コンサートで不動の本多静六役であるテノール歌手の原田勇雅さんが全国植樹祭でも本多博士役で登場した。

一方で、嬉しいことがあれば悲しいこともある。その最大のものは、郷土史家の小林晴夫さんが令和七年六月二十三日に急逝されたことだった。令和八年一月に本多博士の故郷久喜市で永遠の森コンサートをやるという計画に賛同して下さり、ご自身の運転で筆者や文果組の神保会長を乗せて久喜市長のところにお連れ頂いたり、本当にご尽力頂いた。そのご恩は海よりも深く山よりも高い。

小林さんは、ご自身の縁戚で久喜市にゆかりのある中島撫山や中島敦の研究もされており、多くのことを教わった。

最近では県史でも市史でも個人崇拜になるといので、郷土の偉人について掲載することは少なくなっている。

るようだ。しかし郷土愛というものは、郷土の歴史とその土地が輩出した先人のことを学んでこそ醸成されるものである。

そういう意味では、『本多静六通信』はこれまで本多博士の顕彰に大きな役割を果たしてきた。拙著も多くを負っている。発行当初はご家族や弟子の皆さんがご存命だったので、本多博士の思い出を生き生きと記しておられ実に楽しい紙面になっていた。

ただ最近の『本多静六通信』には本多博士に関する新事実がほとんど掲載されなくなった。これは寂しい。本多静六に関してはもっと多面的に研究されてしかるべきだと考えている。

そこで最後に、大変簡単に楽しく、山のように本多博士の関連資料を集めることのできる方法を伝授しておきたい。

まずは国立国会図書館に会員登録する。無料である。すると著作権の切れたデジタル資料が手元のパソコンでどっさり読める。これはもう毎日でも飽きずに資料を涉猟できる優れものだ。

たとえば明治三十三年実業之日本社発刊の『実業家奇聞録』も読める。そこには、塚本道遠農学博士が本

多博士に酒をつぎつつ「いよ若年寄一つ参ろう、相変わらず頭上が寂しそうだ。どうです、ちと植林なさっては？」と頭の薄さをからかわれた本多博士が「どうも地方が衰弱しているから」と、地力と知力をかけた当意即妙な切り返しをして塚本博士をへこませたという愉快なエピソードなども紹介されている。塚本道遠などといってもウイキペディアですぐに出てくる人物ではない。すると今度は、名古屋大学がデータベース化してくれている『人事興信録』が役に立つ。これの第四版に、彼の生年月日から住所から家族構成に到るまでの詳細な個人情報が出てくる。

また渋沢栄一記念財団のHPには『渋沢栄一伝記資料』がデジタルアーカイブになっている。これを見れば渋沢栄一と本多博士との交流も日付まで含めて手に取るように分り、何日でも遊んでいられる。

本多静六執筆中に大日本山林会の会誌『山林』のデジタルアーカイブを発見したのは僥倖であった。一日一ページ(後に三ページ)の執筆で書かれたものの多くは、この『山林』に掲載されてから出版されている。

この会報は大日本山林会の設立からアーカイブがそろっており、設立時は政府主導の形だけの組織だった

のが、徐々に陣容に厚みを加え、政財界の注目を集め、林業の人材を育てていく過程は圧巻であり、本多博士の頑張りが生き生きと伝わってくる。

洪沢栄一は「すぐれた者の魂を真似よ」という言葉を残しているが、我々が生きていく上で最も参考になるのは先人の生き様だ。まだまだ『本多静六通信』のネタは山ほどある。皆さんの趣味と実益を兼ねて、この宝の山からいろいろな発見をしてご紹介して下さることを心から祈念している。

著者紹介／北康利

(きた やすとし)

昭和三十五年愛知県名古屋屋市生。東京大学法学部卒業後、富士銀行入行。平成二十年みずほ証券を退職し、本格的に作家活動に入る。

100年経営の会顧問。日本将棋連盟アドバイザー。西郷隆盛、福澤諭吉、吉田茂など、偉人の評伝を多く執筆している。『白洲次郎 占領を背負った男』（講談社）で、第十回山本七平賞を受賞。

『本多静六 若者よ、人生に投資せよ』（実業之日本社）の著者。

歴史と林業の街「秩父」で全国植樹祭

式典模様 始まりから終わりまで

本多静六博士を顕彰する会 会長 斉藤 悦男

江戸時代のマルチタレント、平賀源内による鉾山開発と炭焼きで有名な秩父で開催された全国植樹祭に、埼玉県久喜市の「本多静六博士を顕彰する会」を代表して参加させていただきました。

皆様にその日の模様をご報告いたします。

参加者の記念植樹

昨夜から降り続いた雨で心配していた天候も、私たちが乗ったバスが秩父ミューズパークに到着した頃にはすっかり回復していました。到着してすぐに、係員の誘導で式典会場の脇を通り抜け、緑の森に囲まれた広い空間に案内されました。そこには既にポットに入った小さな苗木とシャベルがたくさん用意されていました。

係員から、「本日用意された植樹用の苗木は三十二種類、四千八百本」と説明を受けた後、緑色と白色の帽子を被った参加者それぞれが、



既に掘って土がかぶせてあった穴を掘り返し、記念植樹を行いました。



記念植樹の場所で若木を手にする斉藤会長

式典前の会場

植樹後、徒歩で式典会場に移動しました。入り口で透明のビニール袋に入った手荷物の検査とポディチェックを済ませてから、秩父地域の杉で作られた無数のベンチが並ぶ会場に入り、係員から座席に案内されました。

天皇陛下がお座りになる建物（お

野立所）の屋根は木組みで構成されていて、秩父地域の連なる山々や羽ばたく鳥を表現し、これも秩父地域の山々から伐り出された木材で作られているとのことでした。



天皇陛下がお座りになったお野立所

式典行事は十三時五分からなので時間がありません。会場内のおもてなし広場を見学しました。テントには、観光・県産品の展示コーナーがいくつも並び、地場産品の物販所前や木で作られた植樹祭のミニチュメントの前では、記念写真を撮る参加者が列をなしていました。

傍では、小鹿野歌舞伎も演じられていて多くの見学者が熱心に見入っていました。

十一時三十分より埼玉県産の食材を用いた「おもてなし弁当」と埼玉

県産のスギ間伐材を使用した箸が配られ、美味しくいただきました。

### ■オーブニングセレモニー

総合同会は、元NHKアナウンサーの堀野正明氏、式典進行役・アシスタント・サポート役は、高校生が担当し、オーブニングセレモニーが始まりました。

歓迎の挨拶は、四千五百人の招待者を前に清野秩父市長が述べ、大会のテーマ「人・森・川 つなげ未来へ 彩の国」をアトラクションを通して表現し、森林資源の活用、木材の利用拡大を図る「活樹」の重要性を埼玉から発信しました。

アトラクションナビゲーターは、落語家林家たい平さん（秩父市出身）とタレントの朝日奈央さん（入間市出身）のお二人が担当しました。

アトラクションでは、ダンスやユネスコ文化遺産の伝統芸能「秩父屋台囃子」、ヴァイオリン演奏、和太鼓演奏などが披露され、どれも素晴らしい内容が表現されていました。

次に、朝日さんが本多静六博士の業績などを紹介し、博士役の声楽家、原田勇雅さん（熊谷市出身）が、博士がドイツ留学時、劣悪な三等船室に乗り、一等船室の通信省参

事官の坪野平太郎（後に、博士に神戸六甲山系のはげ山緑化を依頼をした第二代神戸市長）から受けた励ましの言葉「望みある身と谷間の水は、しばし木の葉の下を行く」を高々と歌いました。

さらにたい平さんが、博士の活樹に対する思いを「そうだね！静六さん」と語りかける。

最後に、博士役のバリトン歌手、原田勇雅さんが「想いをつなげて」の曲を式典会場一杯に響かせて歌い、そして「木を植えることは愛を植えることである」と結びました。



本多静六博士役の  
原田勇雅さん

### ■記念式典

十四時「まもなく天皇陛下が御到着します」のアナウンスが流れる。

大きなスクリーンには、黒塗りの車数が到着した様子が映し出される。天皇陛下が車から降りると、大野埼玉県知事、額賀大会会長（衆議院議長、国土緑化推進機構会長）が

お出迎えして会場内へご案内される。会場に天皇陛下が現れると待機していた参加者は、一斉に日の丸の小旗を振りながら歓迎の意を表しました。

開会の言葉は沖国土緑化推進機構副理事長が述べ、国家独唱、三旗掲揚と続きました。主催者挨拶は、額賀大会会長。続いて、大野埼玉県知事は、「全国植樹祭は六十六年前に埼玉県で開催された。埼玉県の森林面積は県全体の三十二パーセントを占め、人工林の八割が利用可能な時期を迎える。今後森林資源を『伐つて・使って、植えて、育てる』という循環利用を進めて、適切に管理していくことが重要である。活樹を推進していきたい」と挨拶されました。

### ■天皇陛下のお言葉

冒頭、ご自身の若い時に登った秩父の山々の体験に触れ「埼玉県は、甲武信岳を始めとする奥秩父の山々や武蔵野の面影を残す里山・平地林など、緑豊かな自然に恵まれています。私も、かつて武甲山や雲取山、両神山などの秩父や奥秩父の山々に登ったことがあります。原生林を思わせる奥深い森林や渓谷などの美しい自然に魅了されたことを今でも懐かし

く思い出します」と語られました。森林の持つ役割の重要性については「木材などの林産物を供給するほか、水源を保全するとともに、多くの生き物の生息地を提供し、生物の多様性を守っています。また、国土の保全や地球温暖化防止にも寄与するなど、様々な恩恵をもたらしてくれます」と述べられた。

最後に「一人一人が、これからも森林を大切にし、木の循環利用を進めながら未来に引き継いでいくことが私たちの使命であるこの度の大会テーマである『人・森・川 つなげ未来へ 彩の国』に相応しく、人々が森や川を大切にしながら自然に親しみ、健全な森林づくりや木材の利用を更に進める活動が、ここ埼玉の地から全国へ、そして未来へとつながっていくことを願い私の挨拶いたします」と締めくくった。

### ■お手植え・お手播き

天皇陛下のお手植えは、県木のケヤキ、県内の人工林の六割以上を占めるスギ、県西部の産地に広く自生するトチノキの三種類の若木。

お手播きは、県林業の主要樹種のヒノキ、武蔵野の里山に自生するアカシデの二種類の子。介添役は埼玉緑の少年団が行いました。

終了すると、「天皇陛下にお手植え、お手播きいただきました」とアウンスが流れました。続いて、小泉前農林水産大臣などの県内・外特別招待者による植樹も行われました。



内・外特別招待者の記念植樹

■大会テーマの表現

朝日奈央さんのナビゲートで、日本の最初の林学博士「本多静六」を紹介。

約束として「ここから未来へ」つなげる彩の国「森林の多面的機能に注目しながら、森林資源の活用、木材の利用拡大を図る「活樹」を推進し、埼玉県の多彩な森林を次世代へつなげていくことを誓い、全国に発信しました。

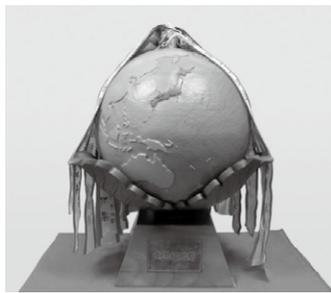
■大会宣言

大会宣言は、冲国土緑化機構副理事長と秩父農工科学高クラブの生徒が次のように行いました。

「森林資源の活用、木材の利用拡大を図る『活樹』を推進し、埼玉県の多彩な森林を次世代へとつなげていくことを誓い、全国に発信します」

■リレーセレモニー

大野埼玉県知事から、次期開催県の中村愛媛県知事へ、全国植樹祭のシンボル「木製地球儀」が引継ぎされました。



木製地球儀  
地球は檜、葉は栴、基台は樺。  
高さ60cm、幅50cm、重さ14.7kg

中村知事の挨拶、埼玉県議会白土議長との閉会の挨拶と続き、天皇陛下ご退場の際は、大野知事がご先導し、天皇陛下は手を振って、会場を後にされました。

■エンディング

感謝の挨拶は、森小鹿野町長が述べ、本大会は無事終了しました。

【本多静六博士と全国植樹祭】

留学から帰国して二年目の明治二十七年五月に「大日本山林会報」のエッセイで米国の植樹祭に触れ、その意義を説いています。

明治二十八年、文部次官牧野伸顕は、米国における「Arbor day」と称する植樹日に影響され、小学生による「学校植樹」を導入しました。実施にあたり東京帝国大学教授の本多博士が著した「学校樹栽培法」というテキストを参考にしました。これは本多博士の大学演習林活動から学校植林へと具体的に展開する内容でした。

本多博士は、学校の校庭の記念植樹や学校林設置を、四月三日の神武天皇祭に定め、子どもたちに植栽体験をさせてはと提案されました。木が成長したら間伐材を現金化し、学校の財政を支えることも出来ることとし、明治三十一年、正式に四月三日が「植栽日」と定められました。本多博士は「記念植樹の手引き」「記念樹の保護手入法」を発刊し、講演やラジオ放送などでも、緑化運動を精力的に推進しました。昭和八

年には四月二日から四日の三日間「愛林日」と定められました。戦争で一時中断されましたが、昭和二十五年から全国植樹祭と形を変え今日に至っています。本多博士の思いは緑の羽根募金や彩の国緑の基金などを通じ、今なお受け継がれています。

【引用文献】

- ① 明治期日本文化史における記念植樹の理念と方法―本多静六「学校樹栽培法」の分析を中心に― 岡本 貴久子
- ② 「記念植樹と日本近代」 林学者 本多静六の思想と事績
- ③ 「本多静六」 若者よ、人生に投資せよ 北 康利

**全国植樹祭**  
(第1回～第76回)



林野庁HPより

本多静六博士を顕彰する会 役員研修紀  
(長野県須坂市 令和七年十月十五日)

### 充実期の設計 臥竜公園

本多静六博士を顕彰する会

理事 渡邊 利章

#### ■なぜ 博士が公園設計を

本多静六博士（以下、博士と略す）は、須坂町（現須坂市）から大正十五年三月十日付けの書簡で、「・・・町に於いて公園を計画致し候に就いては貴下のご高説を拝承仕り施設致し度候・・・」と認められた公園設計の依頼を受けると、二日後の返信で現地踏査の日程調整をお願いしています。当時、博士の名前は全国津々浦々に轟いていました。数々の公園・温泉地・景勝地の設計、数多の重要な官民職を兼務、また「独立自強 健康第一主義」という独自の理念を持ち、保勝会運動にも奔走していた充実期の博士なら白羽の矢が立つのも当然でした。

一方、日本の近代資本主義の父、渋沢栄一翁を中心とした実務的な都合が王子の渋沢邸で度々開かれていました。そこには埼玉県北部の実業家に混じって、博士や須坂町の製糸王「越寿三郎」も出席しています。博士は氷川公園（現大宮公園）の改

良設計に携わり、越は大宮町（当時、現さいたま市）で山丸製糸所を操業し「製糸の街 大宮」の経済を支えていた要人の一人でした。博士と越は渋沢邸で知り合い、かつ大宮という地盤で結ばれていました。越の存在が博士と須坂町を結び付けた一つの要素でもあります。

以下で、臥竜公園の中核である臥竜山と臥竜池について簡単にご紹介します。

#### ■興国寺の保有林、まるごと公園化

臥竜山は、高さ四百七十メートル、比高六十メートル、周囲約二・五キロメートル。長年の地殻変動により山の一部が切り離され、市川扇状地上にできたひさご型の分離丘陵です。町の中心部からも近く、普段は頂上からの眺望、四季折々の美しさ、また健康増進を求める町民の散歩コースになっています。

大正十五年、博士が公園設計を依頼された当時の臥竜山は、製糸業者の運動会などに利用されていましたがほとんど未整備の状態でした。須坂町は製糸業で働く数千人の若い女工さんの福利厚生改善の一環として公園の近代化を図りました。山全体が南麓の古刹興国寺の保有林で、その面積は十五町二反六畝七歩。須坂



臥竜山からの眺望 “手前より”  
アカ松、長野・須坂市街、日本アルプス

町は興国寺と期間三十年（その後は協議延長）年三百円の条件で賃貸契約を結び、早速、博士の「須坂町公園計画案」に沿って砂防工事や散策路整備を開始、街灯・水道・案内板・四阿屋・公衆トイレ・ベンチなどを漸次設置してきました。

今日までのこの約百年間、臥竜山は伊勢湾台風など幾多の自然災害などに遭遇しました。近年では「日本の名松百選」にも選ばれた「根上がり・ねじれ松」が松くい虫で枯れてしまい、地元高校生と共同で新たにたくさんの赤松を再植林しました。山中の説明板には『博士の植栽計画を参考にして二〇一八年から五か年間で「臥竜公園里山整備利用促進基本構想」計画を実施した』との立て看板が設置されていました。

#### ■低地に人工池を

博士は公園設計に当たり臥龍山西麓の低地を掘削して、人口池の築造を次のように提言しています。「黄金樹畑、桑畑等のある低地を掘削して・・・用水の一部を分けて引き入れる。池の大きさは約五十間、南北約百二十間・・・船遊の外、ボートレースも行える」。(原文のまま)

単なる美観だけでなく経営面についても触れています。

昭和六年、須坂町は池の掘削工事を開始するにあたり、砂礫層上にある私有地を買上げ、専門家に湛水調査を依頼しました。結果は「予定地の三分の一は水の浸透（水漏れ）の心配もあるが近くを流れるソブ水（鉄分を含んだ赤い水）を流し、粘土を貼れば問題なく水は溜まる」という結論でした。工事は大恐慌後の失業者延べ六千五百人を動員して九十三日間を終了しましたが、湛水問題は現在でも依然として継続しています。訪問時にも道路の法面の一部にブルーシートが掛けられています。

池の水質汚染も深刻な問題です。夏から秋にかけて藻が発生し、水面が少し緑色に変色してしまいます。現在は、冬季節全面的に水を抜き、春先に新たな水を引き込んで花見

シーズンに備えています。

池の周囲の桜は「全国さくら百選」に選ばれています。四月には樹齢数十年の博士の好きなソメイヨシノ百六十本が花を咲かせます。近隣からは大勢の花見客が来町し、名物の「黒おでん」を食べながら須坂町の経済を潤します。桜の管理は地元ボランティアグループ「桜守りの会」が通年で行っています。

■偉人の小さな心配り

今日の臥竜公園は年間を通して多くの老若男女に利用され、博士の設計理念「独立自彊 健康第一主義」がしっかりと守られています。現須坂市民は、春夏秋冬の景色、大菊花展、親水公園、動物園、博物館、山中散策などで恩恵を受けることができます。

壮大で綿密な公園設計をする博士ですが、小さな心配りも決して忘れません。

【自然学習をする青少年に対して】

須坂町公園計画案の中で「樹木一本一本に、トタン札の縦三寸五分、横五寸位の黒又は白ペンキ塗に、白又は黒色で樹名・科名・羅典名を記したものを樹木に着けるのであるが、樹幹目通り六寸以上のものであれば釘付けにし、それ以下のものに

は針金で縛りつけ、縛り得ないものには側に立札とする」と記しています。博士の優しさを感じます。

【設計謝礼金の分配】

須坂町からの謝礼金二百円は、自身と弟子の池邊武人氏（二十五歳）が五十円ずつ、残り百円は須坂町の保勝会の賛助資金に充てています。博士は、他の出張先でも豪華な接待料理を断り、うどん二杯でさつさと仕事に取り掛かっています。少年時代の質素儉約、水行塩菜の習慣が体の芯まで染みついているのでしょうか。

気候温暖化の現代社会において、博士の業績はますます注目を浴びてきています。前出の渋沢翁など埼玉県の三偉人にプラスアルファなどという声も周辺で聞こえてきます。このように誰もが認める大人物ですが、傲慢な言動はひとかけらも見られません。博士の隠れた側面を知り、改めて驚きと感動を覚えた次第です。



謝礼金送付書

令和七年度  
本多博士の足跡を訪ねて

鉄道防雪林からターラントへ

本多静六博士を顕彰する会

武井 千春

■はじめに

それは二〇二五年六月の事でした。国鉄の土木屋であった父の遺した本を整理していて、『鉄道建設小史』、鉄道に生きた人びと』と題する本を何気なく手に取ったのです。すると、そこに『防災林育成こそわが命』本多静六』と題する一章がありました。この本との出会いがターラントへの大旅行に繋がることは、この時は全く想像すらできませんでした。

■防災林育成こそわが命

本多静六が鉄道防雪林の父でもあったことは様々な資料にありますのでその内容は割愛し、本稿では八十三歳の静六翁と当時の運輸大臣との手紙のやり取りをご紹介します。思いいます。

静六翁が、戦後の復興の予算不足のために鉄道林を伐採してその費用に充てるとのラジオニュースを聞き「鉄道防雪林は自分の提案で造られ、国鉄職員の数十年にわたる努力

で維持拡充されたもので、迂闊な伐採は悔いを千載に残すやを憂える」と運輸大臣に訴え「私も立ち上げたものとして必要があれば現地に赴き最適な更新計画を提案することもやぶさかでない、ぜひとも再考を」とこれまでの経緯を説明したうえで再考を熱く訴えます。最後は、「かかることを申し上げては甚だ僭越傲慢至極で、老人の慎むべきこととは存じますが、私の最も長き関係を有する事業の一つとして閣下のお指図を仰ぐ次第であります。八十三叟 本多静六拜」と結んでいます。

これに対し小沢運輸大臣（現在の小沢代議士の父上）は、鉄道総局施設局長田中茂美の名で「鉄道防雪林伐採に対するご懇篤なる御書簡に接し、謹んで深甚の御礼を申し上げるとともに、主管する責任の立場より斯かる企画は全然事実無根であるばかりでなく、現在、将来ともますます拡充整備の途上にあることをお知らせして貴下のご厚意にお答えしたいと存じます。偕て、明治二十五年貴下の創意により発足した鉄道防雪林は…」と本多静六の功績を認識したうえで「将来供一層ご指導並に御鞭撻を得たいと存じ、右御書簡の返信と致したいと存じます。向寒の砌り、益々御自愛、御壮健にあらせら

ることをお祈り申し上げます。林学博士 本多静六殿」と結び、資料を添えて返信しています。

生涯をかけた鉄道林が危ういとの熱い心がこもった、それでいてこのような年寄りごと、丁寧で控え目、襟を正した手紙と、それに対する林学博士 本多静六殿、と礼を持った返信。読むほうの背筋もピンと伸ばすものであり、その後の私の行動の背中を押してくれるものでした。

■齊藤会長、志村校長との出会い

たまたまパリ駐在の娘家族を八月に訪問する機会があるので、その間にドイツのターラントを訪問しようと計画しました。この後、顕彰する会の齊藤会長と、久喜市立三箇小学校の志村校長先生とお会いし、背中を押される中で、ドレスデン工科大学とターラント小学校に訪問・入構の許可願いのメールを出しました。ちょうど夏休み期間で、ドレスデン工科大学からは返事がもらえませんでした。ターラント小学校からは八月の中旬に訪問を歓迎するとの返事がもらえ、急遽八月二十二日に訪問し、併せてドレスデン工科大学森林科学科と付属植物園を見学することにしました。

■ターラント小学校へ

パリから特急乗継で九時間弱。二泊三日のターラント訪問となりました。ターラント小学校では、若千二十九歳の女性のローテンバッハ校長先生が迎えてくださり、本多静六とターラントの所縁、三箇小学校における本多静六の精神の継承などを紹介して、今後の顕彰する会、三箇小学校との交流をお願いし「いつでもどうぞ」との快諾を得ることができました。



ターラント小学校とローテンバッハ校長

ターラント小学校は、山裾の児童数数十名の小さな小学校ですが、児童は明るく元気で、ローテンバッハ校長先生も、「私には実現したい計画と支える力強い先生方がいます」とホームページで発信されている、と

てもお元気な活動的な校長先生でした。今後も三箇小学校との交流が続くことをお願いしました。

■ドレスデン工科大学森林科学科へ

ターラント小学校の後には、本多静六が学んだ頃はターラント高等森林学校、現在はドレスデン工科大学森林科学科を訪ねました。徒歩二十分ほどでつきます。その外観は、資料集にある百三十五年前のものと同じ変わっていません。屋根上には「FORSTLICHE HOCHSCHULE THARANDT」の文字が本多静六の学んだ頃のまま残されています。中を見ると、もちろん講義室内部は最新の情報機器が用意されていました。



ターラント高等森林学校銘板 (上)  
ドレスデン工科大学 (下)

■本多静六の過ごした下宿へ

大学のすぐ右隣には、静六たちが住んだ下宿の建物が、これまた百三十五年前と変わらぬ姿で建っています。どうやら現在は住む人もなく、草に囲まれ一部荒れ始めていました。あと何年現状のまま残されるのか？心配です。

この他、三箇小から贈られたモミの木のあるドレスデン工科大学付属植物園も訪ねましたが、残念ながら事前情報がなく、植林場所を特定するには至りませんでした。



本多静六が過ごした下宿屋  
(二階に5か月間滞在)

■まとめ

一日だけの短い訪問とはいえ、この小稿では紹介しきれない何枚もの写真と、本多静六が林学を学んだ雰囲気そのままの森の中の小さな街、ターラントを訪ねられ、校長先生とお話してきたことは、私にとって非常に意義深いものでした。

令和七年度  
本多静六博士ゆかりの地訪問

日比谷公園・明治神宮の森

本多静六博士を顕彰する会

理事 美人 昌男

令和七年十一月六日、本会と久喜市との共催による「本多静六博士ゆかりの地訪問」事業を実施し、二十三名のご参加をいただきました。

日比谷公園は、本多静六が辰野金吾博士(東京駅設計者)とのふとした出会いで設計し、明治三十六年に開園した日本最初の洋風近代式公園であり、静六自身が手掛けた公園第一号でもあります。



参加者の皆さん(日比谷公園の首掛けイチョウ前で後ろの建物はカレーで有名な松本楼)

明治神宮は、明治天皇・昭憲皇后崩御後、東京にも何らかの記念施設が欲しいとの国民の要望に応じて渋沢栄一翁などが奔走して造営されました。森の部分を手掛けたのが本多静六達です。全国青年団の勤労奉仕、十万余の献木、「天然更新」の設計によって大正九年に造営されました。

■静六の図面が

生き続ける日比谷公園

小山 久仁子

静六博士は、フリーハンドで大道路を描いて四つに区画し、純日本風庭園以外の三区画を担当した。日比谷見附付近の石垣や濠、木々を生かし、大きい石や黒松は取り崩された各見附跡の残り物を用いた。雲形池や遊歩道、運動場はドイツ公園の型を応用した。この地の遺構とドイツで得た知識を生かしている。

「門に扉を設けなければ、木や花が盗まれてしまう。」市会の攻撃に「公園の花弁を盗まなければ日本は亡国だ。私は公園に沢山の花卉を植えて、国民が花に飽きて盗む気が起こらないくらいにするの

だ。」と答弁したという。市会から十万円も予算を減額されると、博士管理下の農科大学の苗圃の不要苗木をただ同然に払い下げて植えた。わずか一〜二尺の小苗は百二十二年の年月を得て立派な木々に生長していた。

洋花の咲き誇る第一花壇のベンチには大勢の人々が休んでいた。社会情勢や周辺環境は大きく変貌し、公園に対する要請も変化してきたであろうに、今もなお博士が描いた図面とあまり変わっていない。博士が星亨と首を賭けたという大銀杏を見ながら松本楼でカレーを食べた。静六博士もこの風景を思い描きながらカレーやコーヒーを食したのであるか。

■我が町の偉人

「静六博士」を改めて学ぶ

萱森 慶一

事前に久喜市内の本多静六記念館に数回通い本多静六博士について学びました。しかし全く興味がわきませんでした。林業、農業はほぼ経験も体験もありませんでした。専門はメカニックの方でしたからです。しかし、今回明治神宮の座学とガイドによる林苑案内で気持ちも考えも一新しました。

一つ目は、人工的に植栽して創

った杜が、高さ二十メートルを超える鬱蒼とした樹々に育ち、まるで自然の森にいるようでした。本多静六博士が百年後、百五十年後毎に杜が新たに生まれ変わるよう設計したことが、今やこの目の前で最初に植えた松の木が枯れ、次世代のヒノキ等が出てきているのを見て実感できました。

二つ目は、本多静六のドイツで培った知識や経験体験を通して、熱意と努力で成し遂げた明治神宮の森だと思いました。時の総理大臣大隈重信に対して「土地本来に適合した森は、人が手をくわえなくても永遠に続き、自然災害や公害から守ることもできる」と理路整然とした態度で説得をした姿勢は学者であると同時に強い信念を感じました。

三つ目は渋沢栄一との交流が大きく、お互い腹を割って話し、納得するまで話し合う間柄だったからこそ、この計画を実現できたのではないかと思います。

【編集発行】

本多静六博士を顕彰する会(窓口左記)  
久喜市鷲宮行政センター文化振興課  
〒340-0217 久喜市鷲宮6-1-11  
電話 〇四八〇(五八) 一一一一(代)  
久喜市鷲宮行政センター総務・人権係  
電話 〇四八〇(八五) 一一一一(代)